

をジェンダーとの関わりから明らかにし、運動の社会的、文化的変容能力の可能性について考察する。あわせて、アメリカ黒人の社会運動において、女性成員は米国社会と男性成員から二重に抑圧された被害者として論じられることが多いが〔Hooks 1992、萩原一九九七、風呂本二〇〇三、フックス二〇一〇〕、本発表ではこの点についても言及する。

以上を踏まえて、本発表は次のことを明らかにする。すなわち、オリシヤ崇拜運動には、運動形態が変化したとはいえ、伝統的価値観を現在も重んじているゆえに、集合的崇拜拠点(オトウンジ村)にせよ、個別崇拜組織(ハウス)にせよ、運動結成当初からの家父長的、男性優位主義的な実践がみられる領域もある。さらに、ハウスにおける男性結社や女性結社の活動などでは、自由労働イデオロギー〔兼子二〇〇八参考〕にもとづいた「男らしさ」を養成することもあり、家父長的、男性優位主義的な価値観を助長してしまうことも否めない。ただし、オリシヤ崇拜運動を実践する女性成員は、従属的、被保護的立場に終始し、運動によって抑圧されているだけではない。女性成員は、ときには米国という国家の枠組みを超えたヨルバランドのオリシヤ崇拜者や、民族の枠組みを超えた崇拜者とのつながりを築くことで、オリシヤ崇拜のジェンダー規範を変容させている。このことは、結果として、オリシヤ崇拜という実践を軸に女性の地位を向上させるとともに、限定的ではあるが、男性のみが社会的、経済的な責任を負うべきであるという家父長的な価値観から男女双方の成員を解放する可能性をもたすといえよう。

東西霊性交流におけるヨーロッパ側の

受け止め方——その一例——

峯岸 正典

本発表は第二回東西霊性交流の記録から、来日した一七人の修道士、修道女の論考を中心に、なぜ彼らが日本の修行道場で禅の実践、実修をしようとするのか、その要因を考究し、この交流の持っている基本的性格とその特徴について報告しようとするものである。資料としては『カトリック修道士の禅堂体験——第二回東西霊性交流』報告―(発行人・平田精耕、一九八四、五)を用いた。この交流においては①参加者が欧州側からの最初の来日グループであり、日本側も受け入れに力が入っていたということ。②初めて来日した人たちが多く、事前の予備知識がそれ以降の人たちより少ないということ。③「東西霊性交渉」自体を中心となって進める修道士たちが参加していたことなどが特記される。カトリック内部で提示された参加条件は、①修道院で生活していること。②東西の霊性に関心を持っていること。③日本での坐禅、摂心に耐えることができるようある程度坐禅の経験があることであった。参加者十七名のうち二名のみが女性で、平均年齢は五十一歳、司祭が全体の七六%を占め、大半がベネディクト会士であった。修道年数の平均は二十九年で、修道院で指導的立場にある人が五二%。坐禅の経験に関しては、平均八年ということであった。

彼らが来日前に抱いていた「禅」は坐禅、ゆっくりした動

き、シンプル、といったイメージであった。禅が二十四時間の生活全体であり、儀式的側面も強く持つものであるという「予期せぬ発見」や、食事、誦経、立ち居振る舞い等、全てが速く、ついていけず、「軍事教練的」で修行道場は「二十才から三十才くらいまでの若い人が過ごす一時的訓練の場所」という印象がもたれた。これは、①修行道場での生活が基本的には外部に知られていない。②文字化されていないので情報量としては少ない。③その時点におけるヨーロッパの禅と日本の禅が異なるといったことから生じたものと推測される。彼らが持った問題意識は肉体的苦痛もさることながら、僧堂のあり方が修道院とは異なり、自分たちの修道制度と比べていいものなのかどうか、雲水からいかにして完成された禅僧、老師に成長しうるのか、雲水は読んでいるお経の内容も理解していないし、滞在する期間が短いといったことなどについての疑問である。儀礼並びに礼拝についても、複雑で細かく規定されているし、誰に向かって礼拝がなされているのか?等々の意見が寄せられている。

総括として彼らは「ヨーロッパ側の人間は禅を知りたいと望んだ」結果、日本の禅の「常態」をそのまま、丸ごと体験することができたという。交流を進める欧州側の根底にある要因は、①カトリック修道制のなかで変えなくてはならないところがあるという自覚。②カトリック修道制のなかで生きる者として、根源的志向性において近いという禅に対する共感。③第二バチカン公会議以前と以後の修道生活の変化を統合したいという「教義と実践の一致」を願う希求である。この交流の基本的

性格と西洋側の特徴を要約すると、自分よりずっと若い人たちにまじって、肉体的苦痛、不慣れな環境に限界まで耐えることが、修道士としての長いキャリアを保っていた人たちによって体験されたことから、信仰心、求道性に裏打ちされて初めて成り立つ交流であるということが挙げられる。こうしたことの根底には伝統を守りながら、変えるべきところを変えていかなければいけないという自覚と、禅、並びに教義と実践の一致への希求があると言えよう。欧州側は、短期間、一時的、結婚する、雲水がお経を理解していない等の修行道場における「制度的限界」を認識しながらも、なお交流の継続を念願している。このことは、修行道場においてこそ真正に「禅」を学ぶことができるかと彼らが理解していることに基づくものと推測される。

日本における宗教間対話の現状

武藤 亮 飛

宗教間対話の定義は様々であるが、各宗教組織の代表者が出席するものが宗教間対話だとみなされる傾向にある。実際、宗教間対話を推進する人々の中には、宗教間対話とは宗教組織の代表者が出席するものであり、参加者は組織の代表であるという自覚を持たなければならないと主張する人もいる。

たとえば東西霊性交流に出席するのは雲水や修道士である。彼らは各宗教組織の「代表者」として他の参加者からみなされることになる。しかし第十一回東西霊性交流において、少なく